

特277

特277-787



*76W10726 *

787

日ソ中三途約

と

世界の今後



日本青年外交協會版



始



編會協交外年

特277

特277-787



76410726

787

日ソ中主條約

と

世界の今後



日青本外年交協會版

96



日ソ中立條約と世界の今後



目次

(一) 最近におけるソ聯の内政問題……………一
(二) 最近におけるソ聯の外交問題……………五
(三) 將來におけるソ聯の世界政策……………八
(四) 世界大戦の今後……………一〇

76W10726



(一) 最近におけるソ聯の内政問題

ソ聯の内政は極めて複雑であり、且其の防諜組織が極めて精緻であり強力なので、外國人として之を精確に認識することは極めて困難ではあるが、今其の内政問題を各方面の事情を綜合して瞥観するに、最も重要だと思はれるものが三つある。(一) 經濟問題即ち其の重工業政策とロシヤの年來の問題であると共に且永遠の問題ともいへる農民政策との調和 (二) 反革命、反スターリン分子への對策 (三) 民族政策 (即ち多數民族國家の悩みとして其の國內に百數十の異民族を有するソ聯としては、民族政策は内政問題として重大な問題を提出し、極めて重要な地位を占めるものである。)以上の三つを數へることが出来る。

民族政策は現在では大體順調に進み、且反革命反スターリン分子に對する政策

もエヂョフの没落と共に十年に亘る血の肅清工作を終へ、やつと一段落ついでスターリン政権は、現在では兎も角一應の安定を見てゐるのである。ソ聯にとつて最大であり且唯一と思はれる問題は經濟開拓、生産力擴充、重工業國家の確立及び其の基礎の上に立つ強大に機械化された赤軍の建設であるといへる。

即ち現在及び近い將來におけるソ聯の内政問題の最大課題は、自國の經濟的自給自足を確立し、世界一の重工業國家を建設し且之を基礎とする世界最強の赤軍の建設である。

即ち經濟方面においては一九二二年から始められた新經濟政策に依つてソ聯は一九二八年までに一應戦前の總生産額の水準に到達した。一九二八年に有名な第一次五ヶ年計畫が實施されて後第二次第三次と五ヶ年計畫が遂行されたが、現在は第三次五ヶ年計畫の第四年目に當つてゐる。此は農業國から工業國へ發展せしめようとの目的で始めたものである。ソ聯は天然資源を極めて豊富且多様にもつ

ており、其の人的資源もこの目的完遂の爲には充分にあり、重工業國家としての基礎は確固たるものがあるが、唯缺けてゐるものとしては技術の問題がある。此の不足した技術の收得の爲近年ソ聯は外國の、殊に獨米の技師を多數雇ひ入れ且外國に多數の技師を派遣しつこの目的達成に努力してゐる實狀である。他方年々労働強化を行ひ一九三八年末の労働法の改正並に労働手帳制の實施以來、引續いて種々の強化措置が講ぜられ、昨年は職長の權限増進令、労働綱紀緊肅令、品質及規格責任令等の一聯の強化措置が講ぜられた。斯くて最近における其の重工業の發展はソ聯の高言する程のものでは勿論あり得ないであらうが重要軍需關係の生産部門においては列強と角逐する程迄になつており、新しく産業十五ヶ年計畫なるものも立案され、生産消費財においては全資本主義國家を正に凌駕せんとしてゐる。斯くソ聯は着々と生産力擴充に向つて努力を續けてゐるのである。

次に赤軍の擴張並に整備に就いて見よう。一九三三年には二四億ルーブルであ

つた國防費が其後毎年増加され、昨年では五七〇億（三一%）本年では七〇八億（三二%）と漸時膨大な數字に上つて來てゐる現状にある。其の他軍制の方面においては昨年ツオロシロフが國防委員會議長となり、一元統帥強化令が發布されて、他國の様に將軍提督制が制定せられ赤軍徵罰令が發布されるに至つた。斯くてソ聯は銳意、高度國防國家建設の爲に、其の特有の組織力、政治力及び豊富な資源に物を言はせて邁進しつつあるのは極めて注目すべき事實である。

（二）最近におけるソ聯の外交問題

ソ聯が世界革命、世界赤化を究極の目的として居るといふことは今茲に敢へて贅言を要する必要があるまいが、自國の實力と世界情勢及び相手國の實狀に従つて巧に手段方法を變へてゆくのは、實に變幻極まりないものと云ふべきであらう。

而して他方コミンテルンなる國際組織を驅使し、自己の外交の具に供して居ることは此の國の特質であつて、その爲に國際情勢は益々複雑化されてきた。

ソ聯の革命後の外交を大別すると幾多の變遷があつた。其を區分すると人に依つてそれぞれ差異があるけれど、大體革命外交、協調外交の二つに大別することが出来るのである。革命外交は更に西歐主義と極東主義に分けられるが、革命外交が支那における第一次國共合作の分裂（一九二四年—一九二七年七月）と共に

終末をつげるや、ソ聯の外交は次に各國との不可侵條約、中立條約などに依つて資本主義との妥協に依る協調外交に移つていつた。之を細則すると英佛との妥協及び獨との妥協に依る二つの時代に細分され得る。英佛との妥協時代には、一時ソ聯は例のミュンヘン會商に依つて、その國際的地位は悲運のどん底に陥されたが、次の獨・ソ不可侵條約に依つてソ聯の外交は茲に三轉するに至つた。斯くてソ聯の待ちに待つた世界大戰の幕は遂に切つて下されたのである。

斯くて第一次世界大戰後のソ聯は直接革命時代より第一次五ヶ年計畫に至り、革命外交は表面から退き去り、所謂一國社會主義に移行し、資本主義諸國家と協調して自國の産業を開發し生産力を擴充し軍備を擴張せんとする時代となつた。外からの自國への脅威を除く爲に或は英佛と結び、或は獨と手を握り自國を戰禍から免れしめ且他國同士を戦はせて自からは時間的に餘裕を得て國內の整備、實力の養成に邁進する方針をとつた。現在に至る迄に此の政策は或程度の成功を獲

た。又今次大戰には絶對に不介入方針且戰爭の長期化を圖りつつ此の政策を維持するものと思はれるのである。

次に茲に極めて最近のソ聯のバルカン政策及び極東政策に一言しておかう。獨のバルカンへの外交竝に軍事攻勢の豫期以上の成功に内心釋然としないものがあるソ聯は、極東において或種の緩和政策をとらざるを得ない情勢に立至つたのであるまいか、又ソ聯の極東における緩和政策はその近東政策と如何なる關聯を有するものであらうか、或は日本を南進せしめ其れに依つて日米關係の惡化を劃らうとする意圖を有するものではあるまいか、等々種々の臆測がなされる。

(三) 將來におけるソ聯の世界政策

前述した様に現在のソ聯の政策は絶對的な中立及び戦争の長期化であつて、其れに依つて國力を培養し、資本主義諸國家の相剋を圖り、其の疲弊を待つて戦後における絶對的且相對的な國際的地位の向上を圖り、其の世界政策を實現せんとするにあるのである。

其の國內政策にしても戦時共產主義から新經濟政策に移行し、一時は資本主義に移つたとまで言はれながら、其の國力が戦前の程度にまで回復するやここに三轉して第一次五ヶ年計畫を發表し、猛烈な企業の社會化、農業の集團化に驀進し始めたのである。外交方面にしてもソ聯は戦時の革命外交から一轉して一九二八年頃から行つた協調外交、すなはち資本主義國家との協調外交に移り、之を内政

方面の新經濟政策に對照し乍ら行つたのであるが、言はば此は新外交政策とも言へるものである。新經濟政策に依つて余裕を得るや一國社會主義政策を敢行したのであるが、この様にソ聯は外交方面においても現在の新外交政策に依つて其の目的を達し高度國防國家を建設し、對内的にも對外的にも自信を得るのを待つて茲に三轉し、革命外交に移行せざるを得ない状態におかれたのであるが、其處に行くのは、一面その政策から見て必然的なものとも言へるのである。

(四) 世界大戦の今後

一九三八年九月第二次世界戦争の幕は獨波開戦と共に切つて落された。爾後二年足らずの間に獨の電撃作戦は波を三週間にして葬り、蘭白を席捲し、佛を粉碎しノールウエイを攻略し、又最近においてはバルカンを完全に掌握し、西歐は擧げて獨の制覇する所となつた。然し英は其の天與の城砦とも稱すべき英本土に據つて其の優勢なる海軍力と益々増大する米の軍需品物資の援助を恃み、最後の勝利を期待し且夢想して對獨戦争の決意を益々強固にしつつある。西方においてソ聯は獨の豫期に反する迅速にして實利多い戦勝に焦燥と危惧の念を覺えてゐる現状にあるので、突發事件が何時如何なる場所で惹起されるかも知れず、常に火藥を乾燥さしておき國內を總動員體制に置かざるを得ない状態におかれてゐるので

ある。英の屈服又は崩壊は、歐洲は勿論極東、南洋延いては南米におけるアングロ・サクソンの覇權を失墜するに至るであらう。其によつて米國資本主義は原料供給地又其の商品市場をも喪失し輝しい未來と永久の繁榮の望を失ふのみならず、其の前進乃至生存を阻止される可能性がある。殊に英海軍が壊滅乃至獨の手に墮ちたならば、世界の海洋覇權を失ひ、一世紀以前の原始モンロー主義を墨守するを餘儀なくさせらるるかも知れないのである。故に米國は其の資本工業能力を總動員し、一方援英と共に他方自國の軍備充實に邁進しつつあるのである。米は援英を契機として一步一步參戦に近付きつつある。護送及哨戒問題を繞つて論議は沸騰しつつあるが、米は既に其の中立的立場を遠く離れ實質的には既に戦争參加國とも看做されてゐるので、其の形式的參戦不參戦は、現在においては殆んど何等の意味をも有してはゐないのである。米は其の戦争宣言の有無を問はず、今後益々歐洲戦争に介入して行く可き趨勢にある。

斯かる世界現状において世界情勢を主動的にリードしつつあるのは勿論獨であるが、獨の今後の政策の方向と時期とは世界の等しく注目する所である。

バルカン制覇後の獨の作戰目標は對英本土作戰と地中海作戰との二つに分けられる。對英本土作戰に關しては上陸作戰可能なりや否や又もし可能なりとするならば其の時期は？……この問題は世界の軍事専門家或は政治評論家の論議の好題目であるが、其の論旨竝に結論は客觀的事實の冷靜なる認識に基かず、主として各人のイデオロギーの表白か又は其に基く希望の表現に過ぎない。現在獨は空襲による英本土の經濟力の破壊、軍事施設の覆滅を圖ると共に、他方飛行機並に潜水艦による對英逆封鎖を強化し、英の物的抵抗力を除々に削減しつつある。此の作戰は獨の神經戰と見るべきか又は上陸作戰の前哨戰と見るべきであらうか。英が獨の神經戰爭に屈服するには、其の自負心と性格が許さないであらう。又英本土が獨の空襲と逆封鎖の爲に死と沈黙との絶海の孤島になるとしても英海軍の

存在と米の援英とは、客觀的な事實として無視することは不可能な問題ではあるまいか。

然らば對英本土上陸作戰はどうであらう。上陸作戰が可能なる爲には制海權を必要とする、制海權を得る爲には制空權の確立が不可欠なものとなるのである。制空權は暫く措くとして獨伊に依る制海權は短日月を以てしてはその確保は不可能であらう。對英上陸作戰の可能なりや否やは一に長期に亘る絶對確實な兵站線の確保、即ち制海權を得られるや否やに懸る問題となるのである。俠客の毆込み等とは異つて兵站線のない近代戰は思考し得られぬ問題である。

次に獨の他の主要作戰の目標たる地中海作戰を見ると、東にジブラルタル西にスエズがある。ジブラルタル攻略は西班牙を通過しなければならぬ。西班牙は未だ内亂後の國力の疲弊が癒えず獨伊側に内亂當時の恩誼は充分感じてはゐても、樞軸側に同調し、もし獨伊の軍隊通過を認めジブラルタル攻撃を許したなら

ば忽ち英米側から食料封鎖を喰ひ、國內の不安を招來すると云ふ痛し痒しの立場におかれてゐるのである。然し樞軸の優勢は結局西班牙をも其の翼下に收めるであらうから、ジブラルタルの抹殺は時期の問題に過ぎないのである。

獨の東地中海作戦は今やスエズを攻略しアレキサンドリヤを奪取し英の東地中海艦隊を締め出さうとしてゐるのである。スエズ攻略には土耳其經由シリヤ經由、及び北阿弗利加經由の三つの経路があり、最近獨はイラク、英との開戦を契機として獨佛新協定を結び、獨軍のシリヤ通行を認められたので茲に近東情勢は急調を帯びるに至つた。もしも一度イラクにおいて英軍が敗退したならば英の回教諸國に對する威信は地に墜ち、イラク、イランの石油を失ひ、政治的又經濟的に極めて甚大な痛手を受けるであらうが、殊にスエズを攻略され埃及を奪取されたならば英帝國は半ば其の地位を喪失したと言へる。その時の印度の歸趨は刮目にあたひする問題であらう。此の間土耳其古の動向は極めて注目すべきで、獨の對

土政策の如何は、直ちに獨ソ關係にも微妙に影響するので、これに關する限り獨は非常に慎重である。土耳其、イラク、イランにおいて獨ソが大きく勢力範圍を劃定することは果して可能であらうか。可能であるとすれば其の限界は如何といふ問題は極めて機微であり、其は世界情勢如何に左右される。又此の地方における獨ソの關係は其の後における世界情勢に大なる變化を齎らすかも知れないのである。

斯くて獨は一方において對英本土作戦を行ひながら、着々と其の地中海作戦をも進行せしめ英帝國の崩壊を側面から企圖しつつある。

斯る情勢において第二次世界大戰は或國の豫期を裏切り、又或國の希望通り漸次長期消耗戰乃至神經戰に移行しつつあるのである。

然らば各國は今次世界大戰を如何に終結せしめようとしてゐるのか、又如何なる終局的見透しを有してゐるのであらうか。獨伊は歐洲制覇後其の卓越せる陸軍

力を以つて、支配し得る資源を獲得し、英本土の屈服後と雖も英米合作による通商破壊、長期經濟戦に堪え得る自給自足の經濟圏を樹立し、結局において英米の挑戰行爲を無意味なものにして了ほうとしてゐるのである。

ソ聯は平和主義を採るであらうが、是は自國は飽く迄も平和を守り資本主義諸國家には出来るだけ多く且出来るだけ長期に亘つて戰爭せしめようとするものであつて、より客觀的に言へば戰爭的平和主義とも稱すべきであらう。即ち外は固い甲羅で守り、内は極めて弾力性の多い政策と準備を有さんとするものである。ソ聯は資本主義諸國家相剋の結果其等諸國が相共に疲弊したならば、その變幻極まりない思想工作と、潮の如き赤軍の展開に依つて第二次世界戰爭をソヴェエト流に終結せしめようと圖つてゐる。

英米は自己の優勢なる海軍力と資本と物資に物を言はせ、藉すに時を以てし、漸次其の國防力を充實増大せしめ、獨伊に對しては經濟的な壓迫を加へ、其の疲弊、國內不安、非戰氣運の醸成を圖り、以て第一次世界大戰の如く獨の内部崩壊を期待しつつあるのである。

斯くて世界は獨伊を中心とする歐洲經濟圏、ソ聯を中心とする赤色經濟圏、米を中心とする南北兩米經濟圏及び日本を中心とする大東亞經濟圏に漸次凝結しようとしつつあるが、現在此の四大經濟圏は長期消耗戰の傾向を辿りつつあるのである。

而て此の四大經濟圏は其の自然的地理的條件、軍事力、政治組織、經濟力等において夫々特色があり、且長短優劣があり、何れが最も強大且つ富裕であるかは斷言出来ない。今後の世界史は此の四大經濟圏の離合集散又は盛衰によつてその歴史を展開してゆくであらう。

昭和十六年六月七日印刷
昭和十六年六月十日發行

日ノ中立條約と世界の今後

定價 一〇 錢

著者 日本青年外交協會

發行者 東京市麴町區六番町三ノ四
水上素夫

印刷者 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
若林吉郎兵衛



發行所

東京市麴町區
六番町三ノ四

日本青年外交協會出版部

電話九段(33)二九八三番
振替東京 八三五七三番

文部省推薦

若きドイツは鍛へる

ヘルムート・シュテルレヒト著 日本青年外交協會研究部譯

今次歐洲戰に於てドイツは決定的な勝利を得た。何がかかる勝利へ導いていつたのであらうか？ それは決して謂ふ所の謎の新兵器ではない。それは實に若く且つ固く結ばれた強烈なる精神の武器に基くものであつた。前大戰以來忍苦に満ちた生活裡に見出したドイツの掟は新しい理念の爲に戰を決意する瞬間の偉大さであつた。打ち克ち難い悲劇といふものはない。あるものはただ可能性を求めて勝利へ突進む心意の力である。高度強力國防國家建設を希む者は若き再建國ドイツを知らねばならぬ。

四六判上製二五〇頁 定價 一圓五十錢 千十五錢

新國家の組織

ロバート・A・ブレイディー著 日本青年外交協會研究部譯

本書こそはまさにドイツ及びフランス研究の決定版である。模倣と追従に飾られたフランス主義理論の書は市場に溢れてゐる。だが、此の書の如く科學性を興趣ある行文の中に藏しつつ、良心的な立場をもつて鋭く深くドイツ・フランスを掘り下げたものが嘗てあつたらうか？ ナチ權力の發現される諸機關、労働・食料・文化・輸出入・通貨等を規制する諸官局の活動を最も具體的に、餘す所なく説き明かして居り、フランスと社會革命、ナチスと民衆、生産手段、資本主義とナチ黨——これらの根本的な諸問題は本書において始めてその全貌を露呈した。

菊判上製四二三頁 定價 二圓五十錢 千十五錢

太平洋地政治學

カルル・ハウスホーファー著 日本青年外交協會研究部譯 地圖圖表附

世界史の轉換期に於て、今や太平洋世界の凡ゆる課題が歴史の前面に登場して來た。新しき太平洋を制する者こそ、新しき世界史を書く者でなければならぬ。歴史の自然的基礎たる地理學が、今日ほど密接に政治と結びついてその現實面を露呈してゐる時はない。然もこの現實面が東亞後進諸民族とその指導者たる日本の歴史の契機となりつつある時、太平洋新秩序形成の理論と方式にとつて本書の示唆するところ尠なからざるものがあらう。協會研究部一ヶ年半に亘る單一翻譯と綜合調査の獨自出版形式により遂に其苦心が結實した。

上巻・菊判三二〇頁 定價二圓八十錢 下巻・菊判二四〇頁 定價二圓七十錢

世界經濟と磅・圓及び弗

オットー・ブライデラー著 日本青年外交協會研究部譯

本書は、ハイデルベルク大學の「社會科學及國家學研究所」が、ヨーロッパの「經濟的運命」を検討せる勞作を最初に發表したものである。ここに「ヨーロッパ的問題性」の視角から取上げられてゐる世界經濟恐慌下の世界的通貨一磅、圓及び弗の問題は、蓋し今日における世界經濟の諸問題をば最も鋭く剔抉せるものと云へよう。副題にいふ「イギリス、日本及びアメリカにおける金融的景氣政策」その國民經濟的及び世界經濟的意義の解明は、直ちに國際政局の透視への強力なる望遠鏡であり、且つ顯微鏡の役割を果すものであらう。

菊判上製二四三頁 附表四〇頁 定價 二圓五十錢 千十五錢

民族と戦争

新明正道・加田哲二・清水幾太郎・永田清・前原光雄著

歴史を知る國民のみが、つねに最も榮ある歴史をつくる。しかも今日まであらゆる歴史は戦争によつて綴られてきた。われわれの民族こそ正にそこから發展してきたのである。今や民族の問題はあらゆる國際紛争の發端であり、これが解決のすべてである。

四六判並製 二五〇頁 定價 一圓五十錢 菊判上製 二六〇頁 定價 二圓二十錢 千十五錢

太平洋讀本

日本青年外交協會研究部編

太平洋時代来る！の呼聲あつてから既に久しい。われわれはその時代その時代の危機を潜り抜けて平和維持に努力を拂つて来た。然し昨今の激しい世界變貌時期に當つて、太平洋問題は其の全貌を最後の危機線上に露呈した。次代の日本を救ふのは現代の過渡期を閉つてみるわれわれの責任である。ここに小出版部は太平洋の全貌を廣く國民に知らしめ、人種問題産業等をあまみず編纂し、敢へて世に問はんとするものである。世人一般必讀の書たるを疑はない。

B6判美裝 四〇〇頁 定價 一圓五十錢 千十五錢

世界資源分割論

パーバラ・ワード著 原勝譯

現實の世界は、その資源があまりにも英米佛に壟斷されてきて、文明のより高次の發展の爲にも、人類のより高次の福祉の爲にも、活用されなかつた。資源の一切が文明の頽廢と人類の不正の爲に悪用されてきた。パーバラ・ワードは明徹な論理と豊富な資料に基礎をおいて、科學的に多角形的に立論を構成してゐる。彼はこの提案を作成するに當つて、英佛の植民地經營や資源活用問題を鋭く批判し、非難してゐる。そして、日本の海外依存性と植民地、資源問題等を正確に理解してゐる。

B6判美裝 二五〇頁 定價 一圓五十錢 千十五錢

中國の諸問題と其解決

汪兆銘著 日本青年外交協會研究部譯

新しき支那の立役者として、新大陸の運命を双肩に擔つて起つた英雄として、革命兒として時論家として汪兆銘はもはや知られ過ぎる程知られてゐるが、正にその革命的熱情の源泉とも云ふべき冷徹にして飽くなき學究的精神を以て祖國支那の運命を追及し、過去にたいする峻厳なる批判をとなして將來の一大抱負を吐露してゐる。學徒汪兆銘を知る者は少ない。今ここにその缺を補ふべく、本譯書を上梓し、親しく學究汪兆銘の氣概に接する機會を得た。所謂汪兆銘運動の動向を根本的に窺知せんとする者は、ここにこそその鍵を見出すであらう。

菊判上製 二六〇頁 定價 二圓二十錢 千十五錢

汪兆銘と新支那

田中香苗・村上剛共著
片々たる汪兆銘傳に非ず、無味乾燥なる汪兆銘論に非ず、波瀾萬丈の政治生活を羅如たらしむる近代中國政治裏面史であり、汪を主人公とせる政治小説の觀がある。數寄を極めた政治生活、滿洲事變後の汪兆銘、日支關係の明暗二重相、對日強硬論の擡頭で汪兆銘苦境に陥る、汪兆銘の辭職劇、汪兆銘留任後の日支關係、六中全会と五全大會の開催、張群の登場と日支外交の逆轉、支那事變のその前夜、支那事變、廣東・武漢攻略前後の和平問題、長沙事件と和平派の擡頭、汪兆銘の重慶脱出、附錄 汪の前進と重要文書、汪兆銘の政治力、汪派の人々、附錄 汪の前進と重要文書

四六判美裝 三〇〇頁 定價 一圓五十錢 千十五錢

支那銀行論

陳家屯著 日本青年外交協會研究部譯
支那における貨幣の資本化の過程、相貌、資本の狀態等が如何に歐米的なものと異つてゐるか。支那では文明國に見られる如く、純粹に貨幣が資本化する傾向が弱い。貨幣には純粹に資本主義的な資本とならずに活躍し得る産業面がある。従つて有力な近代的な資本とは、その相貌を、性格を異にしてゐる。ここに支那たる特色があるのである。一見雜然と見えつつも新しいものと古いものとが渾然たる一體を形成し、支那的性格を表現してゐる。ここにわれわれは重要な研究對照を見るのである。

菊判上製 一八〇頁 定價 二圓 千十五錢

支那社會政治思想史

呂振羽著 原勝・角田次郎共譯
現下の世界的課題たる東亞の全體的な政治圖の確立の爲に、支那の歴史を究明することが要求されてゐる。その有力な理由の一つを、ヒルト博士が指摘せる如く、支那の文化を組成した周朝が、單に支那にのみ止まらず極東全般に亘つて、現代に至るまで、その一切の進歩を支配する根柢を造成してゐることに求めても、支那の歴史究明は、その意義を高く評價せねばならない。原著者呂振羽は、支那の歴史に社會科學者としての立場から、嚴正峻烈な解剖のメスを加へてゐる。

上卷菊判特製三八〇頁 定價三圓二十錢・下卷二四〇頁 定價二圓八十錢 千十五錢

西洋文化の支那への影響

張星烺著 實藤惠秀譯
近代支那が生まれるに至るまでの西歐諸國との文化交流はどんなものであつたらうか？ 現代支那における新銳學徒の手になる本書は其等問題解決の決定書である。本書において、先づ歐化の定義から筆を起し、中國歐化の媒介者として商人、旅行者、軍人、政治家、宣教師をあげ次いで物質文明の流入、ヨーロッパ思想の流入を、あらゆる面から完膚なきまでに描き盡してゐる。われわれは對支文化工作を行ふに先だち先づ政治經濟方面の惡辣さと宣教師の身命を擲うつ熱情とを知らねばならぬ。本書はその意味からも譯出された。

B6判美裝 三〇〇頁 定價 一圓七十錢 千十五錢

朱巴 公著 日本青年外交協會研究部譯
支那の國家歲計と財政制度

一八六五年ロシアと約した軍事借款を初め次々歐米諸國となした各種借款は、借款返済の爲の借款となり、現在に至るも尙ほ斷ち切れぬ慘虐な鐵鎖となつた。支那は洋鬼の足下に呻吟する運命をばはされたのである。一讀してわれわれは歐米の侵犯に對する著者の激しい、悲壯な抗議を感ずる。數十頁に亘る表を掲げて緻密に書き上げた支那の國家財政經濟史が、この種の本にあり勝る表を掲げて落しいらぬのは、著者が唯單なる學究の徒たるに止まらず、支那人の支那を愛する激しい民族的情熱を以つて世界に叩きつけるべく書綴つた抗議の書だからである。

四六判 一四〇頁 定價 一圓八十錢 千十五錢

陳 殷 公著 日本青年外交協會研究部譯
支那農業協同組合論

序言 緒論 近代的協同組合の發生、その任務並びに目的
第一篇 支那に於ける協同組合の發展と狀態 支那に於ける現代の農業の概観
支那の建設に於ける必要なる任務としての農業協同組合運動 支那に於ける協
同組合の發展 指導機關、協同組合聯合會、縣協同組合及び個々の協同組合
第二篇 ドイツの農業協同組合制度とその支那に於ける農業協同組合の建設への應
用の可能性 ライプツィヒの協同組合の制度 ハーンスの制度 プロシア協同組合中央金
庫とその總聯合及び全國聯合に對する地位 ドイツの制度の支那に於ける農業協
同組合の建設への應用の可能性 結論、参考文献

四六判 二〇〇頁 定價 一圓二十錢 千十五錢

原 勝 著
東亞解放論序說

東亞は、十八世紀の末葉以來、歐米の侵犯と害惡の鐵鎖の下に、あまりにも隷屬的
な、あまりにも無慘な狀態を押しつけられてきた。この歐米の侵犯と害惡は、優れ
たる歐米文化の移入と云ふ祝福のやうな外觀を呈して「東洋文化」を尊重する勢力
を東洋人自身の手によつて、破壊させてきた。だが、歴史の皮肉は、歐米が東亞に
もちこんできた民族主義を東亞諸民族の武器たらしめて、東亞の獨立とルネッサン
スを戦はしめてゐる。東亞は、今や、歐米の制度や、習慣を模倣するよりはりに「東
洋人」としての生活や道德に、崇高な地位を發見することに覺醒めてきてゐる。

四六判上製 三五〇頁 定價 一圓八十錢 千十五錢

田 知 花 信 量 著
新大陸政策の基調

現下の猫の目の如く變化する世界情勢に對應し、今後の新しき偉大なる國防國家日
本を建設せんとする際、先づ其の解決をわれわれは日支問題におかねばならぬ。
其は新東亞建設の第一段階である。本書において著者はジャーナリストとしての慧
眼な視界に、日支問題の鍵を其の理論と實踐において鮮明に映し出してゐる。實際
に支那に生活したジャーナリスト田知花氏の目に映じた日支問題解決の基調に、わ
れわれは得るところ尠くない。大方讀者の一讀すべき名著たるを疑はない。

四六判上製 一八〇頁 定價 一圓 千十五錢

415
359

近 刊 豫 告

逸見 銳著 (五月中旬)
アメリカ評論

この世界改變の時代にあつてイギリスと共にデモクラシーの最後の牙城を守るものはアメリカである。斯る激しい變貌の時代にアメリカは果して世界にその覇を競ひ、牙城を確保し得るであらうか？ アメリカを口にする者は多い。然し彼等の知つてゐるアメリカは、ほんの表面だけでしかない。眞のアメリカは？
アメリカに生活し、よく彼地の事情に通ずる新銳評論家逸見銳は斯くアメリカを見る。われわれは本書に再度アメリカを衝く必要があるを信ずる。

B6判美裝 二〇〇頁 定價 一圓五十錢

今中 次 磨 著 (五月下旬)

東亞の政治的新段階

所謂東亞共榮圈なるものの確立を、ほして眞に世界新秩序を確保せんとするとき、われわれは先づその最も基本的な第一段階たるべき日支合作の眞髓を把握しなくてはなるまい。新支那は如何にして建設の歴史的契機を獲得し、如何なる力の結合によつて建設途上を前進し始めたか——實にここにこそ新世紀の一切の課題が胚胎してゐるのだ。眞度克明をもつて知られた著者が、身を以てこの偉大なる歩武を経験しつつ、その一步一步を記録したのが本書である。ひとはここに始めて東亞の黎明を眞に仰ぐの感を深くするであらう。

定價 二圓八十錢 (豫定)

高 國 防 家 國 家 國 新 國 民 政 治 發 足

世 界 週 刊

新時代の綜合雜誌

週刊 毎土曜發行

第一週號は増大號となり六四頁
定價三十五錢（増大號のみ全國書
店に販賣）第二週より第四週迄
普通號四八頁定價五錢（普通號
は會員のみに速報されます）
合理的な會員制度をお薦めします
一ヶ年會費六圓

◆ 獨自編輯 ◆

國際狀勢の正しい把握
前進的指導精神
新國防文化の創造

終